
3.17—20～30 キロ圏内の孤立

(太田圭祐、南相馬 10 日間の救命医療、東京、時事通信出版、2011、p.105-129)

2015 年 6 月 19 日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

私の資料は東日本大震災後、名古屋県から福島県南相馬市に駆けつけ約 10 日間医療支援活動をした医師の手記である。記載されている手記内容は震災 6 日後の 3 月 17 日から、筆者が名古屋に帰る 3 月 21 日までのものである。以下、その内容を紹介する。

3 月 17 日、ようやく本格的に福島県の内陸部や仙台にある病院への当院患者の転院搬送が決まった。病棟が機能しておらず入院患者ゼロを目指している当院スタッフにとって、これは大きな希望となる。数多くの患者一人ひとりの紹介状を書くのは一苦勞であった。そして受け入れは決まったものの救急車の応援は得られず、病院の救急車で搬送することとなった。重症患者を優先したかったが、一度に運べる人数などを考えるととりあえず軽症患者を多く運ぶしかなかった。運んでいる最中、あたりを見ると道路状況は思いのほか悪くない。それなのになぜ救援が来ないのか、やはり被ばく地域と思われているせいなのかと感じざるを得なかった。搬送患者の一人に中学生の女の子がいた。彼女は家族を失っていたが、必死に周りの患者を励ましており、そんな彼女の強さに感動した。そしてようやく搬送先の病院につくと多くの医師、スタッフが出迎えてくれ、うれしかった反面こうして病院機能が維持されていることに少し羨ましさを感じたのも事実である。そして帰り道、南相馬市民を乗せた 6-7 台のバスとすれ違った。どうやら南相馬市外への住民の避難が始まったらしい。住民もいなくなった街はとても静かで死の街と化していた。住人がいないこの街で医療を続ける意味があるのだろうか、わからなくなった。しかし入院患者ゼロをかがけていたスタッフに「すべての患者を搬送する」という具体的な目標ができたことで全体的に士気は上がった。医療人としての責任を果たすというモチベーションは思ったよりもすごかった。そんな中夜遅くまで医師、看護師総出で残ったすべての患者の紹介状を作成した。必ず最後に「引き受けてくださり感謝いたします。困っていました」と書き添えるようにした。

ある日、検死の依頼があった。当院の近くにある高校体育館が仮説の遺体安置所となっており駆けつけると、原型をとどめているきれいなご遺体は少なく、医療関係者の私が見てもつらい状況だった。震災が残したつらく厳しい現実を前にして、死の宣告が医師にとってどれほど重要なものであるかを実感させられた。

患者もだいぶ搬送され当院が静かになりはじめた頃、近隣町のある病院で患者 21 名が死亡したというニュースが報じられた。その病院は福島第一原発の半径 20 km 圏内にあるため、14 日午前の 3 号機爆発に伴い病院に避難指示が出された。そのため病院に残っていた患者 146 人については 14 日 15 日と二日にかけて自衛隊による救出・搬送が行わ

れたが、その際に病院関係者の付き添いはなく搬送中や搬送後に21名がなくなったという。この時この病院には爆風はもちろん爆発によって破壊された細かいコンクリートの破片なども飛んでいたらしい。そんな状況ではそれは誰でも逃げたくもなるだろう。しかし病院関係者の責任を問うと警察の捜査が行われるらしいとのことだった。このニュースを見て、私は、医師の責任とは何なのかと考えずにはいられなかった。医療関係者は避難してはいけないのか、責務ははたしてどこまで及ぶのだろうか悩んだ。

19日の午後、防災担当大臣および南相馬市長が当院に訪れた。こちらから、「いまだ入院している患者もおり、またまだ病院の機能は回復していない、どうか支援してほしい」と要望すると、やはり国の命令は強力で、次の日に残りすべての患者が自衛隊によってたった一日で搬送されることが決定した。私達が数人ずつ苦勞して搬送していたのが、国や行政が動くところほどまでに物事が早く進むのかと考えると、国会議員などにはもっとはやく現地を見にきてほしかった。

このようにして残りの患者全員の搬送も終了し、スタッフはみんな安堵した。余裕が生まれ、ミーティングを開き、これからの当院の方針などを話した。これまでと違い、長期的な展望を見据えた質問が多く出されていた。結果的に病院の外来は維持すること、入院患者をとることはできないが最低限の救急当番体制はとることなどが決定した。私は一時的に赴任しているにすぎないため発言する立場ではないと判断し、この時点で自分の役割は終わったと確信した。夜中、名古屋へ帰る簡単な身支度を整え、スタッフとともに10日間のことを語り合い、別れを惜しんだ。